

ヘルムート・ダンナーにおける教育人間学と現象学

著者	高根 雅啓
引用	大阪府立大学紀要（人文・社会科学）. 66, p.1-13
URL	http://doi.org/10.24729/00006022

ヘルムート・ダンナーにおける教育人間学と現象学

高 根 雅 啓

ドイツにおいても、初等・中等教育、さらに高等教育の改革が進んでいる。ドイツの初等・中等教育の改革は、2000年のPISAショックを受けて始まった。高等教育については、ポローニャ・プロセスの中で、大学改革が始まっている。こういった改革の中で、「陶冶(Bildung)」が改めて問題となっている¹。教育学において「陶冶」という訳語が伝統的に与えられてきたBildungというドイツ語は、教育、人間形成とも訳されてきたが、近年の研究の中では、定着した訳語すらも定まっていなくてまで言われる。陶冶はドイツ教育学特有の概念であり、それにピッタリと対応する日本語はない²。しかし、その理由で、日本において陶冶が問題とならないというわけではない。陶冶(Bildung)の問題とは、教育において、どのような人間像(Bild)を念頭に置くのかという問題である。陶冶の含む哲学的・人間学的な問題を抜きにして教育を論じることはできない。ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)に由来する「精神科学的教育学」の立場に立つ現代ドイツの教育学者ヘルムート・ダンナー(Helmut Danner, 1941-)は、教育学における陶冶概念の重要性を指摘している点で注目に値する。ダンナーにおいて、陶冶は、哲学的・人間学の問題設定を含むことが強調される。精神病理学者L・ビンスワンガー(Ludwig Binswanger, 1881-1966)の「現象学的人間学」の研究を通じて、「内容的にも方法論的にも」、つまり、教育現実における人間存在の根本構造、そして、教育学の研究方法としての現象学の可能性についてダンナーは論じた。こういったダンナーの思想に着目することは、陶冶について考えるうえで現代的意義を持つ。

¹ Vgl., J. Krautz: Ware Bildung? Schule und Universität unter Diktat der Ökonomie. München. 2011.『本当の陶冶か、それとも、陶冶は商品か』という挑発的なタイトルの書を著したヨッヘン・クラウツ(Jochen Krautz, 1966-)は、現在進行している改革に反対する代表的な教育学者である。クラウツは、PISAをきっかけとする初等中等教育改革やポローニャ・プロセスに基づく高等教育改革について、それが陶冶概念を軽視していることを批判している。

² 次の文献を参照。①L・ヴィガー、山名淳、藤井佳世編著『人間形成と承認』北大路書房、2014年。「序章」で、Bildungの訳語について、「人間形成」という語を選択した経緯が、明治期以降の導入過程も紹介しながら歴史的・哲学的に詳細に論じられている。②久田敏彦監修・ドイツ教授学研究会編『PISA後の教育をどうとらえるか - ドイツを通してみる』八千代出版、2013年。書名の通り、PISA以降の教育改革を論じた書物であるが、「あとがき」で、Bildungの用語・概念について、意味の多様性について論じている。前掲書とは意味内容が異なる捉え方をしている。「本研究会で何もいまさら、Bildungとは何かをあらためて哲学的・歴史的にのみ議論しようというのではない。むしろ、学力形成とコンピテンシー志向との関係、教科の学習と教科外の学びとの関係、『主要教科』における学習と周辺教科における学習との関係、学校における学びと学校外における学びとの関係、学校期における学びと学校期外における育ちとの関係など、具体的な教育実践・構想の文脈のなかで、Bildungという用語のとらえ方から目を背けずに議論をしていきたい」。なお、陶冶について、体系的に論じた文献として次の書を挙げる。③山崎高哉『ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義』玉川大学出版部、1993年。特に、Ⅲ部5章「『陶冶』概念の発展とその意義」を参照。

もちろん、ビンスワンガーは、精神科の臨床医ないし精神病理学者であって、教育学的な論文を著したわけではない。しかし、ビンスワンガーにとっては、精神医学における人間存在としての根本構造が問題であり、人間的世界において他者と共に在る人間存在が問題であった。教育学においても、教育現実における大人と共に在る子どもが問題である。とりわけ、そのことは、精神科学的教育学においては、教育的関係として特徴づけられ、教育学の主要な研究テーマとなった。こういった共通性を考えれば、ビンスワンガーの現象学的人間学は教育学にとって有意義なのである。

ビンスワンガーは、新カント派のナトルプ (Paul Natorp, 1854-1924) やベルクソン (Henri-Louis Bergson, 1859-1941) の影響を受けながら、特に、フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938)、そして、ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の思想を批判的に受容し、「現存在分析」を唱えた。ハイデガーに対抗して、「愛」が現存在の根本形式であると主張した。「愛の共同相互存在」「愛し合いの共同相互存在」が人間の現存在の根本形式であり、人間存在は、愛に注目すれば、「世界内存在」であると同時に、「世界超越存在」であるとした。ビンスワンガーよれば、人間存在は「世界内世界超越存在」である。

ビンスワンガーは、ハイデガーの『存在と時間』(Sein und Zeit, 1927) に対して、それを批判して、『人間の現存在の根本形式と認識』(Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins)³ という大著を 1942 年に公刊している。1946 年には、「現象学について」(Über Phänomenologie) という講演等を収録した『講演・論文集 第 1 巻 - 現象学的人間学について』(Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Band 1 Zur phänomenologischen Anthropologie)⁴ を公刊している。ここでは、この二つの論考に特に注目する。

ドイツにおいてビンスワンガーの業績については決して忘れられたものではない。ビンスワンガーの著書や論文の多くは現在、『ルードヴィッヒ・ビンスワンガー選集』⁵ として、4 巻にまとめられて 1992 年から 1994 年にかけて出版されている。あるいは、例えば、近年の研究書『ルードヴィッヒ・ビンスワンガーの精神病理学的現存在の実存論的・存在論的基礎付け』においても、「現代の哲学研究、精神分析的な哲学および精神分析の業績は、現存在分析のアクチュアリティを示す証拠である」⁶ と述べられている⁷。

³ Ludwig Binswanger: Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins. 1942.

⁴ L. Binswanger: Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Band 1. Zur phänomenologischen Anthropologie. 1947. 2. Aufl. 1961.

⁵ Vgl. L. Binswanger. Hrsg. H.-J. Braun; Ludwig Binswanger Ausgewählte Werke: in vier Bänden. Bd.1. 1992. Bd.2. 1993. Bd.3. 1994. Bd.4. 1994. 「現象学について」が収録されている『講演・論文集第 1 巻 現象学的人間学について』は、『ルードヴィッヒ・ビンスワンガー選集』の第一巻に収録されている。『人間の現存在の根本形式と認識』は、選集の第 2 巻に収録されている。

⁶ Vgl. Heinz-Peter Krienen: Ludwig Binswangers Versuch einer existential-ontologischen Grundlegung des psychopathologischen Daseins. 1982. S.9-10.

第1章 ビンスワンガーの人間学

「ルードヴィッヒ・ビンスワンガーの現象学的人間学——教育学に対するその意義」(Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers. Ihre Bedeutung für die Pädagogik) をダンナーは著し、精神病理学者のビンスワンガーに関する考察を基にして、哲学的人間学と現象学的考察法について構想している。この論考は、W・リピッツ (Wilfried Lippitz, 1945-)⁸と共にダンナーが編者を務めた『記述・理解・行動——教育学における現象学的考察』(Beschreiben - Verstehen - Handeln. phänomenologische Forschungen in der Pädagogik. 1984)⁹の中に収録したものである。この論考の中で、ダンナーは、ビンスワンガーの現象学的人間学について、「ビンスワンガーは、教育学者ではなしに精神病理学者であっても、『内容的』にも、『方法論的』にもきわめて刺激的である」¹⁰としたうえで、ビンスワンガーの現象学的人間学に関する教育学的意義を論じている。ここで内容的にと表現されているのは、ビンスワンガーが課題とした哲学的人間学であり、方法論的というのは、現象学をビンスワンガーが考察方法として用いたことを指している。

ビンスワンガーの精神医学や心理療法の知見を、教育学に直接に応用する意図はここではまったくない。あるいは、ビンスワンガーの研究から、新しい教育学理論を構築することが課題はない。こういったダンナーの態度は適切である。ビンスワンガーに注目するのは、第一に、ビンスワンガーにとっての根本的な問題は、精神医学が前提としなければならない人間像を明らかにすることであったからである。ビンスワンガーの表現に従えば、「人間の現存在の根本形式」が問題であった。ビンスワンガーの最も主要な著作の書名が、『人間の現存在の根本形式と認識』であることがそのことを象徴している。人間の現存在の根本形式こそが、すべての精神医学および心理学が前提としなければならないとビンスワンガーは考えた。このような人間学的志向性は、教育学と共通するものである。

⁷ ①ビンスワンガーなども含めて現象学的心理学に関する心理学の中での位置づけに関しては、次の論考に詳しい。山竹伸二「現象学的心理学の可能性」『アジア太平洋レビュー 2010』(大阪経済法科大学、2010年)。
②ビンスワンガーも含め精神医学と現象学について論じたのは木村敏(1931-)である。例えば、「精神医学と現象学」(1980)。現在は『自己・あいだ・時間 - 現象学的精神病理学』(木村敏、筑摩書房、2006年)に収録されている。
③ビンスワンガーについて最も体系的に論じたものの一つは次の論稿である。宮本忠雄「ビンスワンガー」、『精神病理学1 - 異常心理学講座第7巻』みすず書房、1966年。
④また、次の書でもビンスワンガーについて詳細に論じられている。霜山徳爾『現存在分析と現象学 - 霜山徳爾著作集3』学樹書房、2001年。この書に収められた論文「現存在分析」の初出は、『異常心理学講座第3巻』(みすず書房、1968年)である。

⁸ リピッツには、「解釈学的 - 現象学的教育学」といった著作がある。Vgl. W. Lippitz: Die hermeneutisch-phänomenologische Pädagogik. In; Herbert Gudjons, Rita Teske, Reiner Winker (Hg), Erziehungswissenschaftliche Theorien. 1994.

⁹ H. Danner, W. Lippitz (Hrsg.): Beschreiben - Verstehen - Handeln. Phänomenologische Forschungen in der Pädagogik. 1984.

¹⁰ H. Danner: Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers. Ihre Bedeutung für die Pädagogik S.123. In: Beschreiben - Verstehen - Handeln. 1984.

第二に、ビンスワンガーが現象学的考察を行ったことがポイントである。精神科学的教育学は、デイルタイの思想から始まったことから解釈学を中心においていた。その後、現象学をも精神科学的教育学は自覚的に取り入れることになる。解釈学も現象学も、自然科学主義的な研究の台頭と優位性に対抗して、それぞれ思想を展開していた¹¹。

ビンスワンガーは、臨床医として、自然科学的な精神医学に基づいた精神療法を行ったわけではない。むしろ、自然科学的方法ではなく、精神科学的方法によって、精神医学を基礎づけようとした。ビンスワンガーは、フッサールの研究を通じて、「自然主義的蒙を啓かれた」（「自然主義的白内障をとりのぞかれた」）と述べている。例えば、『講演・論文集 第1巻－現象学的人間学について』の「序文」において、フッサールと、フッサールの師ブレンターノ (Franz Brentano 1838-1917) の名を挙げて読者に次のように語りかけている。「ブレンターノや、フッサールの『論理学研究』とその現象学に深くかかわりあうことによって、著者の『自然主義的白内障』が決定的にとりのぞかれ、こうして本書にみる諸研究への道がはじめて開かれていったからには、読者にまず、フッサールの現象学と、対象化的思考方法、とりわけ自然科学的思考方法にたいするその反立的関係を洞察する可能性が、あたえられなければならない」¹²。このように、ビンスワンガーは、フッサールの現象学に基づいて、自然科学的思考方法とは対立する現象学的思考方法を確立しようとする¹³。

精神医学ないし心理学において当時支配的になりつつあった自然科学的方法に対する現象学思考方法、そして、人間存在の根本形式の解明、この二点においてビンスワンガーとダンナーは共通の問題意識を持つのである。ダンナーは次のように強調する。「このような人間存在の根本形式にこそ、どんな心理学であっても、どんな精神医学や心理療法であっても導かれなければならない」¹⁴。

ビンスワンガーは『講演・論文集第1巻－現象学的人間学について』の序文の次のように説明する。「この巻は、方法的にも主題的にもたがいに密接に結びついている一連の講演と論文を、

¹¹ ダンナーは、教育学において現象学的考察の重要性を論じていた。ダンナーの『精神科学的教育学の諸方法』は、1979年の初版からよく読まれ2006年までに5版重ねているが、解釈学、現象学、弁証法が教育学的考察において重要だとし、それぞれについて詳細に論じたものである。なお、ダンナーはもともとハイデガーの研究から学術研究を始めている。ダンナーの最初の著作は、『ハイデガーにおける神的なものと神』(Das Göttliche und Gott bei Heidegger, 1971)である。ハイデガー研究者としてもダンナーは、ビンスワンガーに関心を寄せたのである。

¹² L. Binswanger: *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze*. Band 1. 1947. S.7. L・ビンスワンガー著、萩野恒一、宮本忠雄、木村敏訳『現象学人間学』3ページ。以下でも、この文献からの引用については、この邦訳に従っているが、一部改めている。

¹³ ビンスワンガーは、フッサールを高く評価しているにも関わらず、他方では、ベルグソンやナトルプと同様の試みにすぎないという評価もしている。「フッサールの現象学は、心理学が客観化の学から主観化の学への道程の途上でなしとげたいくつかの革命的变化のひとつを意味するにすぎない。すでに、フッサールに先立って、ベルグソンの直観主義やナトルプの再構成心理学が同一の方向をうちたてようとしていた」。(L・ビンスワンガー『現象学について』59ページ。a.a.O., S.48.)。ビンスワンガーがフッサールに対して相反する二つの評価していたことについては、ダンナーも注目している。Vgl. H. Danner: *Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers*. S.131.

¹⁴ H. Danner: a.a.O., S.123-124.

年代順にまとめたものである。まずその方向についていうと、それは、精神科学的ないし自然科学的な付け加えを別にすれば、フッサールの現象学にたずさわったことの成果であり、またその主題についていうと、それは、人間存在の本質的な根本連関ないし根本構造への洞見によって生じたものであり、まさしくそれは、健康と疾患の分離以前の主題といえる。それゆえこれらの研究を現象学的人間学への寄与という表題のもとにまとめることは、方法的にも主題的にも正しい¹⁵。ここで「この巻」と呼ばれる『講演・論文集第1巻』は、1922年から1945年の論文、したがって、41歳から64歳までの論考をまとめたものであり、その時間の長さから言っても、ビンズワンガーの生涯にわたっての学的な立場が明確に示されている。つまり、精神医学ないし精神療法においても、「健康と疾患の分離以前の人間存在の本質的な根本連関ないし根本構造」を洞察しようとする現象学的人間学の構築が、ビンズワンガーの生涯を通じてのテーマであった。

ビンズワンガーは、ハイデガーを通じて、人間存在の根本構造を見出す。ビンズワンガーは、ハイデガーの『存在と時間』の意義を認め、「現存在分析」(Daseinanalyse)を精神療法の中に位置づけようとした。しかし、ダンナーによれば、注目すべきは、ビンズワンガーは、ハイデガーの『存在と時間』について、誤解を犯したということである。この誤解こそが、「きわめて実り豊かなもの」を産み出した。『存在と時間』について誤解を犯したのは、ビンズワンガーだけではない。ハイデガーは、現存在の分析を通じて、存在に関する基礎存在論を構築しようという意図で『存在と時間』を書いた。しかし、ビンズワンガーは、基礎存在論としてではなく、哲学的人間学として、『存在と時間』を理解した。

「ビンズワンガーは、『存在と時間』を人間学的にとらえてしまい、ハイデガーの基礎存在論的契機を見誤った」とダンナーは指摘する。実際のところ、このような誤解については、1962年に公刊された『人間の現存在の根本形式と認識』の第三版の「序文」で、ビンズワンガー自身が次のように誤りを認めている。「この誤解は、生産的なものであったのが、最もひどい誤解は、実存疇を、存在論的にではなく、たとえ極めて実り豊かなものであったとしても、もっぱら、範疇的にとらえて議論を進めたことである。」¹⁶。ハイデガーの現存在においては愛という契機が存在しないとビンズワンガーは批判した。しかし、その批判は誤りであったとビンズワンガー自身が認めている。「ハイデガーからの逸脱の核心」は、「基礎的存在論を人間学的に理解したこと」ではなくむしろ、「愛を存在論的に理解しようとしたこと」であると自ら述べている¹⁷。

ビンズワンガーの誤解は端的にはダンナーによれば次のようなものである。「この誤解は、ハイデガーにおいてあらゆる点でまったく価値自由な、世界内存在の存在構造を作り上げる『関心』を、一面的にしかも否定的な色合いの現存在様式と把握したところにあった」。不安や死、そして、

¹⁵ L. Binswanger 『現象学人間学』3ページ。L. Binswanger: a.a.O. S.7.

¹⁶ L. Binswanger: Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins. S.5. (In: Hrsg. H. -J. Braun; Ludwig Binswanger Ausgewählte Werke. Bd.1. 1992)。引用は、1942年の初版ではなく、ビンズワンガー選集からのものである。

¹⁷ L. Binswanger: a.a.O., S.5.

関心（憂慮）といったもともとそれ自体は「価値自由な」概念を、実存主義的概念として理解したため、ハイデガーの言う関心に対して、愛を対置することになった。こういった誤解こそが、ビンズワングーに人間学的な発展のきっかけをもたらした。ビンズワングーは、関心によって人間の現存在は、「個別化」の方向へのみ捉えられているとハイデガーを批判することになった。そして、「ビンズワングーは、共同存在の現存在様式を完全かつ根本的に対置した」。愛を人間存在の構造を作り上げるものとして、関心と同等に位置づけた。「愛の共同相互存在」が、『人間の現存在の根本形式と認識』の主題となると説く。

ビンズワングーは、関心と同時に愛をも存在論的に理解し、愛を欠いた世界内存在を一面的かつ否定的なものとして考えたのである。関心から構成された世界内存在の構造に基づいている限り、人間の現存在は、「個別化」に向かってしか理解されていないとビンズワングーは考えた。それゆえ、ビンズワングーは次のように強調することになる。現存在は「我と汝の共同相互存在」であり、「愛における我々性」に基づくものである。

こういったことこそが、ビンズワングーにとって「創造的な人間学的構想」を産み出したとダンナーは評価する。ビンズワングーは、共同存在という現存在の様式を提起した¹⁸。したがって、ビンズワングーの「誤解のおかげで」、現象学的人間学が展開されることになった。「誤解のおかげで」、ビンズワングーは、自らの考察を「現象学的人間学」と名付け、同時に、共同相互存在という現存在の根本様式を明確にしたのである。

『人間の現存在の根本形式と認識』において論じられる現存在の根本形式について、ダンナーに基づいて次のように総括できる¹⁹。人間の現存在には、三つの根本形式がある。根源的な段階は、「共同相互存在」(Mit-einander-sein)であり、「愛し合いながらの共同相互存在（愛の共同相互存在）」(das liebende Mit-einander-sein)である。「端的に言えば、愛である。愛こそが、両数性の根本様式である」。両数性は、「両数的様態」(dualer Modus)とも表現される。人間の現存在の根本形式の第二は、他者との「共存存在」である。この形式は、「複数性」ないし「複数的様態」(pluraler Modus)と呼ばれる。第三の根本形式は、「私自身に向かう本来的存在」である。この第三の根本形式をビンズワングーは「実存」と呼ぶ。この形式は、「単数性」ないし「単数的様態」(singularer Modus)である。ここでいう実存とは、ハイデガーに従えば、「本来の実存」である。

このように両数的様態を重視することにより、ビンズワングーは、「愛の共同相互存在」を現

¹⁸ H. Danner: a.a.O., S.124.

¹⁹ Vgl. H. Danner: S.125-129. 宮本忠雄「ビンズワングー」416-419 ページを参照。ここでの、『人間の現存在の根本形式と認識』におけるビンズワングーの人間学についての概要は、ダンナーの論稿と宮本忠雄の論稿に依拠している。ビンズワングーにおいては、「なにものかであつたむ」(Nehmen-bei-etwas)もキーワードの一つとなるが、これについては、稿を改めて論じることとする。また、空間性と時間性についても論じなければならないが、ここでは、宮本忠雄の次のような指摘を引用するにとどめる。「愛の両数的様態にあっては、空間は無限で同時に接近しており、隔たりと近さは特異な空間様式によって超越されるが、その空間様式は、永遠が時間にたいするのと同じ関係を空間にたいしてもっている。愛の両数的様態はまた、未来ばかりでなく回顧的でもある永遠によっても特徴づけられる。瞬間は一時的な持続を排除することによって永遠と一致する」(前掲書、417 ページ)。

存在の基本的な根本形式と見なすのである。これは、ハイデガーに対する批判となる。ハイデガーは、現存在を、個別化されたものと見ている。それに対して、ビンズワンガーは、「我々性」(Wirheit, Unsrigkeit)として働いている現存在への視点を提起したのである。「我々性こそが、我や汝よりも、先立ってある。私自身や汝自身は、それを前提とする」。ダンナーによれば、この点で、ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) の我汝関係よりも、ビンズワンガーは、より根源的であると指摘する。ブーバーにおける「間」の強調に対して、我と汝の直接的結びつきである「愛」を強調するからである²⁰。

ビンズワンガーにおける存在概念について、ダンナーは、存在が、アクチュアルな存在として理解されているとする。私は存在する、我々は存在する。このような表現に現れているのは、単なる存在するというのではなく、アクチュアルな「存在する」ということである。「存在する」ということは、同時に「何々に対して」「何者かに向けられて」存在するということである。私は私に対して存在している。私は他者に対して存在している。このように指摘して、ダンナーは、ビンズワンガーにおける存在概念が、ハイデガーに依拠している世界内存在であると同時に、愛にも基づくものであるという。私は私という単独で存在するのではなく、世界への超越において、世界の中で、存在者において、他者とともに、私自身に対して、存在する。『人間の現存在の根本形式と認識』の公刊以降に、このような世界内存在について論じるビンズワンガーの言葉を引用しよう。「ついで私自身は、ハイデガーの関心の意味での世界内存在すなわち超越に対して、愛としての世界超越存在を対比させたが(『人間の現存在の根本形式と認識』1942年)、そこからは、この『世界超越的』構造からも人間を理解し記述するという人間学への要請がでてくる」^{21,22}。

このような人間存在の理解は、フッサールの志向性を、ビンズワンガーが重視しているためである。『講演・論文集第1巻』の序文で、次のように、志向性の考えをより徹底するように呼び掛けている。「ただし読者は、この講演に述べられているよりもなお一層、『意識生活の固有の本質性格』としての志向性に目を向けてほしい。というのは、『心理学の遺産は志向性に対する盲目である』というフッサールが心理学にくわえた非難は、今日もなお正しいからである。志向性＝なにもものかに向けられていること＝志向的能作は、この講演では、(志向的という形容詞がなくても)作用、体験、意識形態などについて語られるところではつねに、問題になって

²⁰ Vgl. H. Danner: a.a.O., S.125. なお、ダンナーは、ブーバーについて次の論考で考察している。Vgl. H. Danner: Martin Buber - Dialogische Erziehung zur Verantwortung. In: H. Danner: Zum Menschen erziehen. Frankfurt. 1985.

²¹ L・ビンズワンガー『現象学について』7ページ。L. Binswanger: Ausgewählte Vorträge und Aufsätze. Band 1. S.10-11.

²² 確かに、このような表現については、『現象学について』の翻訳者の一人の荻野恒一も困惑し疑問を投げかけている。「多くの読者、とくにハイデガーの造詣の深い哲学専門の方がたは、本論文の多くの個所で、ビンズワンガーがどこまで『存在と時間』を正しく理解しているか、という点に疑惑をもち、またかれが、たとえば『ハイデガーのゾルゲの意味での世界内存在、すなわち超越作用に対して、リーベとしての世界超越存在を対比させる』とか、などという場合(一部省略)むしろ困惑をおぼえられるかも知れない」。L・ビンズワンガー『現象学について』の荻野恒一「解説」311ページより引用。

いる。フッサールやのちのハイデガーの諸概念、すなわち、世界化 (Mundanisierung) ないし世界化 (Weltlichung)、超越一般や『構成された諸超越の世界』という意味での世界といった概念は、志向性からしか理解できない」²³。

志向性をエッセンスとするビンズワンガーの人間存在について端的に理解できる箇所を講演集から引用して総括とする。「世界内存在はいつも同時に、私とおなじような人たち、共同現存在者たちとともに世界の中にあることを意味するからです。ハイデガーは超越としての世界内存在において認識の主客分裂を見抜いたばかりでなく、また私と世界との間の『割れ目』を止揚したばかりでなく、超越としての主体性の構造をも明らかにしたわけですが、そのかぎりでは人間存在とその特別な存在様式の学問的研究に了解の新たな地平と新たな刺激を与えたのです。おわかりのように—そしてこの点が私にはとりわけ大事なのですが—主体 (人間、人格) と客体 (対象、環界) への存在の分裂に代わってここにあらわれるのは、超越の中で保証された現存在と世界との統一なのです」²⁴。

第2章 教育学におけるビンズワンガーの人間学の意義

ビンズワンガーの哲学的人間学は教育学にとってどのような意義をもつのだろうか。

人間存在の根本様式の三つの区分により、教育実践や教育に関する理論に対しては、「質的な基準」が示されることになる。さまざまな教育実践および教育理論が、明確な基準に基づき区別され評価されることになる。

ビンズワンガーにおいて、人間存在は、三つの根本様式に整理されている。すなわち、第一に、両数的様態である愛の共同相互存在・愛し合いの共同相互存在、第二に、複数的様態である共同存在、第三に、単数的様態である実存という三つの根本様式である。これらの三つの根本様式の区別により、「質的な基準」が出来上がり、教育実践や教育に関する理論は、質的に明瞭に整理されることになる。さらに、ビンズワンガーにおける、愛の共同相互存在という両数的様態の優位性には注目すべきである。例えば、ブーバーにおける我汝関係についての考察は、教育的関係を考える重要な視点を提起した。同様に、ビンズワンガーの我々性に基づく愛の共同相互存在という基準に従って、教育実践と教育に関する理論の質が決められる。教育者と被教育者の間の教育的関係の在り方が、教育理論における重要なポイントとなる。教育実践及び教育に関する理論は、たとえ意識的でなくてもすでに前提となっているその人間像を問い直されなければならない。共同相互存在として人間を措定しているのか、あるいは、共同存在として措定しているのかによって明確に区別されることになる。

そのような人間像に関する問題に教育学は取り組まなければならないとして、ダンナーは次

²³ L・ビンズワンガー『現象学について』3-4 ページ。L. Binswanger: Ausgewählte Vorträge und Aufsätze. Band 1. S.7.

²⁴ 前掲書、262 ページ。a.a.O., S.193.

のように述べる。「教育理論は、ピンスワンガーの哲学的人間学の思考に倣い、その人間学的課題を教育学の課題へと引き受けることができるようにすることで、その哲学的人間学的思考を適切に取り上げることができなければならない」²⁵。こうして、教育理論に対する批判的吟味のための質的基準ができあがる。例えば、量的なもののみを志向する教育理論、技術的志向の教育理論、規範的な志向の教育理論については批判されるべきものとなる。ダンナーによれば、共同相互存在に基づく教育理論の前提は、量的に計測可能なものでもないし、技術的に操作可能なものでもなく、特定の世界観に基づいた規範的なものでも決してないということが重要である²⁶。

なぜこのように教育実践や教育理論を評価する質的基準を求めるのか。さまざまな教育理論が台頭する中で、ダンナーが精神科学的教育学に積極的意義を認め、他の教育理論を退けることを主張するからである。1960年代以降の教育学の状況をダンナーは次のように説明している。「社会科学に定位した経験的教育科学は、その後、精神科学的教育学をドイツから追い出そうとした。さらに、例えば、サイバネテックス教育科学やプログラム学習、フランクフルト学派の社会批判に方向づけられた解放的教育学、ニール (Alexander Sutherland Neill, 1883-1973) のサマーヒル教育にならった反権威主義教育などのような他の教育思潮や流行の波もそれに付け加わった。こうして、教育と教授は、しばしば、経験的方法によって測定可能であると同時に、表現可能であるような社会的、心的、技術的機能に還元されることになった。「しかしそれでもなお、われわれは教育現象に含まれている意味の契機を適切に省察するという放棄することのできない任務が残されている」²⁷。

このような状況の中で、ダンナーは、精神科学的教育学の現代的意義を強調する。ただし、それは、ディルタイが基礎づけた解釈学のみを志向したものではない。むしろ、ダンナーは歴史的な意味での精神科学的教育学に懐疑的な立場をとっている。従来の精神科学的教育学は歴史的現象でしかない。「ドイツの伝統的な現象形態を取って現れた精神科学的教育学とは、教育・陶冶事象が科学的思考に突きつけた挑戦に対する歴史的に制約された応答に他ならない」²⁸。より具体的には端的に次のように四つのポイントにまとめられる。1. 「『精神科学的教育学』は、一種の歴史現象であって、もはやこの意味でのみ話題とされるべきであろう」。2. 「しかし、教育と陶冶の諸現象を適切に把握しようとするいかなる教育理論も、精神科学的教育学によって省察されてきた教育と陶冶の本質的内容を顧慮しない限り、十全なものではない」。3. 「(ドイツ) 教育学において精神科学的教育学は、もし教育と陶冶の諸現象が教育学によって歪曲されるべきでないとすれば、無視されてはならない課題を果たしてきた」。4. 「この課題について、

²⁵ H. Danner: a.a.O., S.136.

²⁶ a.a.O., S.136.

²⁷ H・ダンナー・山崎高哉監訳『意味への教育 - 学的方法論と人間学的基礎』玉川大学出版部、1989年、4-7ページ。引用は、「日本語版への序」からであり、ドイツ語版では相応する部分はない。

²⁸ H. Danner: Überlegungen zu einer 'sinn'-orientierten Pädagogik. In: M. J. Langeveld, H. Danner: Methodologie und 'Sinn'-orientierung in der Pädagogik, München, 1989. S.108. ダンナー・山崎監訳、前掲書、216ページ。引用は邦訳に基づくが一部を変えている。

改めて熟考することが不可欠である。その際問題となるのは、精神科学的教育学の復興でもないし、いわんやその複製を作り出すことでもない。むしろ、この課題を新たに規定し直すことが大事なのである」²⁹。

精神科学的教育学が目指したことの一つは、意味カテゴリーを重視する学の構築であった。自然科学に対抗し、個別事象はその連関から理解されなければならないという解釈学的方法ないし現象学的方法を取ってきた。そういった意味カテゴリーを重視することにより、自然科学的方法ができなかった教育現実から考察を出発することが可能となった。精神科学的教育学がなぜ教育現実の理解のために解釈学的手法や現象学的方法を必要としたかと言えば、<教育現実が意味カテゴリーから成立し、自然科学的方法を拒絶する有意味で多義的なもの、つまり「その意味を定かにしない」ものであったから>である³⁰。教育と陶冶という事象そのものが意味に満ちた事象であり、精神科学的考察法を必要とし、自然科学的考察法を拒否する。

ダンナーは、精神科学的教育学について、精神科学的教育学の取り組んできた課題を継承する一方で、歴史的に解釈学に依存してきた精神科学的教育学について、現象学の意義を強調することになる。解釈学的に理解されなければならないことは、現象学的に解明されていなければならない。その意味で、ビンズワングーの人間学は、教育学における現象学的考察にとって手本とすべき範例となる。ダンナーはビンズワングーの現象学的特徴について3点を挙げている。1. ビンズワングーは、きわめて自覚的に現象学的な段階を経て考察を行った。現象学的な考察を適切に行うことによって、自然科学的・心理学的な考察方法とは異なる立場をとった。2. ビンズワングーは、フッサールの現象学から、特に範疇的直観に注目しそれを継承した。「フッサールとは反対に、ビンズワングーは、〈意識〉内容に関心があったのではなく、対象に関心があったのである」。3. ビンズワングーは、詩、言語、範例といったものの解釈から、構造を解明し現象学的考察を行った³¹。

とくに注目しなければならないのは、ビンズワングーがフッサールから範疇的直観のみを継承したことである。この点で、ビンズワングーの現象学に対する関係は、ダンナーの現象学に対する関係と同じである。ダンナーは、ビンズワングーが「フッサールの現象学にとって中心的な意味をもっている現象学的還元および超越論的還元を無視している」とも総括している³²。もちろん、それはもはや現象学ではないのではないのか。そのような疑問ないし反論がこのような立場に対してなされるのも当然である。しかし、ダンナーにおいては、超越論的還元を経て超越論的主観性の問題に立ち入ることは、教育学のような個別諸科学において用いられる「応用現象学」の問題ではない³³。

²⁹ H. Danner: a.a.O., S.107-108. H・ダンナー・山崎監訳、前掲書、215 ページ。

³⁰ ここでの「意味を定かにしない」というポイントについての考察は、塚本正明の次の論文を参照している。塚本正明『現代の解釈学的哲学 - デルタイおよびそれ以後の新展開』世界思想社、1995年。特に18ページ。

³¹ H. Danner: Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers. S.137.

³² H. Danner: Überlegungen zu einer 'sinn'-orientierten Pädagogik., S.151. H・ダンナー・山崎監訳、前掲書、308-309 ページ。

³³ H. Danner: Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers.S.132.

この点について、ダンナーは、『精神科学的教育学の方法－解釈学、現象学、弁証法への入門』(Methoden geisteswissenschaftlicher Pädagogik. Einleitung in Hermeneutik, Phänomenologie und Dialektik. 1. Aufl. 1979, 2. Aufl.1989, 3. Aufl. 1994, 4. Aufl. 1998, 5. Aufl. 2006)³⁴で詳細に論じている。「本来の現象学」と「方法としての現象学」との区別にダンナーは注目する。前者の意味での現象学は、フッサールの中心テーマである超越論的主観性を論じる。他方、方法としての現象学は、哲学的人間学や実存哲学といった精神科学の学問領域に影響を与えたが、超越論的主観性については問題としなかった。

「本来の現象学」と「方法としての現象学」の違いは、志向性における「意識・所与」についての捉え方にある³⁵。ダンナーによれば、フッサールが取り組んだ「本来の現象学」は、「意識・所与」に関して、「意識」に力点を置いて考察した。他方、「方法としての現象学」は、「意識・所与」に関して、「所与」に力点を置いた。「意識」に力点を置くフッサールは、超越論的主観性において「どのように」その所与が現れるのかを考察の中心とした。他方、「所与」に力点を置く哲学的人間学や実存哲学は、「意識・所与」のうち、「所与」にのみ注目した。この場合、哲学的人間学や実存哲学は、フッサールの本当の意図をもはや失っている。フッサールの意図は、超越論的還元を経て、世界の構成を示すことにある。すべての経験に「先立って」ある「われ」へと還元される。ダンナーは、フッサールの超越論的還元において、「方法としての現象学」という視点が見失われ、「本質直観」が問題とならないと指摘する。

それゆえ、「現象学的人間学」とビンズワンガーが自ら呼ぶものも、〈現象学的な〉人間学にすぎないし、より厳密に言えば、「現象学を志向する人間学」なのである³⁶。

もちろん、ビンズワンガーの人間学に対しては批判もなされる。ビンズワンガー自身が認めているハイデガーに関する誤解への批判ばかりではない。例えば、ボルノウ(O. F. Bollnow, 1903-1991)は、ビンズワンガーが認める誤解はむしろ問題ではなく、関心と愛とが、単純に図式化された「二極性」が前提とされていることを批判する。ハイデガーへの批判として、関心に対して愛を対置させることで人間の現存在をビンズワンガーは明らかにしようとした。しかし、これは、人間存在について図式化して単純化しているにすぎない。ボルノウによれば、確かにこの二極性こそが、愛し合う共同体の我々性によって、個々人の実存的自己を補って完全にするものである。しかし、この二極性は、自然、あるいは、多様な文化をもはらむ歴史といったこれ以外の領域を含んではいない、という³⁷。ボルノウは、デイルタイの生の哲学が取り上

³⁴ H. Danner: Methoden geisteswissenschaftlicher Pädagogik. Einleitung in Hermeneutik, Phänomenologie und Dialektik. München, 1.Aufl.1979, 2.Aufl.1989, 3.Aufl. 1994, 4.Aufl. 1998, 5.Aufl. 2006.

³⁵ H. Danner: Methoden geisteswissenschaftlicher Pädagogik. 5.Aufl. 2006. S.136.

³⁶ H. Danner: Die phänomenologische Anthropologie Ludwig Binswangers. S.138.

³⁷ O. F. Bollnow: Problem der Anthropologie. In: Die Sammlung. 1945. 1. Jg., S.126-127. ボルノウは、1945年に、「Die Sammlung」に、ビンズワンガーの『人間の現存在の諸形式と認識』に関する書評「人間学の問題」を寄稿している。ボルノウは、ビンズワンガーの業績を、特に『気分の本質』(Das Wesen der Stimmungen, 1941)、『人間と空間』(Mensch und Raum, 1963)において高く評価している。

げた文化や歴史といった問題がビンスワンガーの考察に欠けている点を批判する³⁸。

1988年に出版されたダンナーの邦訳書の「日本語版への序」から引用しておこう。「最近、根っからの経験主義者が、ある教育会議の席上、純粋な感覚 - 知覚に代わって、今日、意味 - 知覚がよりいっそう、認識原理まで高められようとしているが、それは誤りであると述べた」。「もちろん、かの学者の意図は、精神科学的教育学に対するあてこすりを楽しむところにあったことは言うまでもない」。このような、意味志向性に対する皮肉とあてこすり (Seitenhieb) についてのエピソードをダンナーは自著の邦訳の冒頭に寄せている³⁹。

³⁸ 愛をテーマとする教育学における近年の先行研究としては、次の論稿を挙げる。田中智志『共存在の教育学－愛を黙示するハイデガー』東京大学出版会、2017年。

³⁹ なお、ダンナーは、2015年5月26日から6月26日まで訪日し京都に滞在した。教育学における現象学的研究については、そのおりに、ビンスワンガーを研究するようにアドバイスを受けた。

Philosophical anthropology and phenomenology in the educational theory of Helmut Danner

Masahiro TAKANE

This study considers the role of philosophical anthropology and phenomenology in educational theory. The work of Helmut Danner is widely followed in German philosophical pedagogy and therefore is worth examining on this topic.

In his theory, Danner claims that philosophical anthropology is necessary for the theory of education and that philosophical anthropology uses phenomenological research methods. Phenomenology exerted a major influence on philosophical anthropology in educational theory. Danner argues that Ludwig Binswanger's phenomenological anthropology is important for educational theory. Binswanger was strongly influenced by Edmund Husserl and Martin Heidegger. He regarded their brands of phenomenology as essential elements in his anthropological method. He was a psychiatrist and a psychopathologist by training. However, his interest was to understand patients as human beings. He believed that psychiatry required a philosophical anthropology. In this respect, his thought has something in common with pedagogy, but we are not to apply psychiatric theory to education.

Humanistic pedagogy, in German, *Geisteswissenschaftliche Pädagogik*, must be given a foundation by philosophical anthropology and phenomenology. If philosophical anthropology and phenomenology are ignored, pedagogy become incapable of making educational realities the subject of research. Humanistic pedagogy started in Wilhelm Dilthey in Germany, and for a long time it was the dominant academic position of pedagogy. However, academic pedagogy has been strongly influenced by sociology and psychology from the 1960s to the present. Sociology and psychology can only consider educational reality in one way. For this reason, we must assert the validity of philosophical anthropology and phenomenology and must resurrect humanistic pedagogy.